様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７８６

研究課題名（和文）古代・中世の朝鮮半島における貨幣流通の様相と東アジア世界

研究課題名（英文）The money circulation in the ancient -medieval Korean Peninsula.

研究代表者
三上　喜孝（MIKAMI, Yoshitaka）

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０３３１２９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、これまであまり関心が持たれてこなかった、朝鮮半島の古代・中世における貨幣流通の実態を明らかにすることであった。古代・中世の朝鮮半島では、中国で盛んに発行された円形方孔の銅銭の影響を常に受けながらも、それらの銅銭は実際に流通したものと考えるよりもむしろ、呪術的な意図で用いられることが多く、実際の社会においては、現物貨幣の影響力が強いことが明らかになった。この点が、同じ中国の影響を受けた日本の古代・中世社会とは異なる特質であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the actual condition of the money circulation in the ancient and the medieval Korean Peninsula .In the ancient and medieval Korean Peninsula, though it was always subject to the influence of the copper coin published by China, it is rather used by magical purpose in many cases, and it became clear that the influence of actual thing money is strong rather than the copper coins in society.
This point is the different special feature from the ancient and the medieval Japan which was subject to the same influence of the China .

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学一般

キーワード：東アジア世界　銭貨流通　現物貨幣

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、日本古代の貨幣流通の実態研究を行ってきた。日本の古代銭貨は、7 世紀後半の「富本銭」の鋳造にはじまり、708 年の「和同開珎」発行に引きつがれ、10 世紀半ばの「乾元大宝」に至るまで、13 種類の銅銭が鋳造されてきた。こうした銅銭のモデルとなったものが、中国・唐代に発行された「開元通宝」であった。日本の古代国家は、中国の銅銭をモデルとして、独自の貨幣を創出したのである。
中世になると、日本社会は独自の貨幣を発行せず、もっぱら宋銭を中心とする中国銭を輸入してこれを流通させていた。他国の貨幣を自国の貨幣として流通させる中世の貨幣経済は、中世社会そのもののもつ特質と、不可分な関係にあったものと思われる。このように、前近代の日本社会の貨幣流通は、徹頭徹尾、中国との関係で論じられてきた。しかしながら、同じ東アジア世界に位置する朝鮮半島では、どうだったのだろうか。これまで、この点についての視角が、まったく欠如していたのである。朝鮮半島においては、日本列島のように、古代（三国時代～統一新羅）において独自の銭貨が作られることもなく、また、中世（高麗）になっても、日本列島のように、中国銭を大量に輸入して、それを自国の貨幣として用いる、といった実態も存在しなかった。11 世紀末から 12 世紀初頭の高麗時代に、独自の銭貨を鋳造した事実はあるが、きわめて例外的な存在であった。つまり、政治的には、同じように中国の影響を受けていながらも、日本列島の貨幣流通のあり方と、大きく異なっていたのである。いったい、この違いは、何を意味するのか、これまでまったく明らかにされてこなかったのである。
そこで本研究では、まずその基礎作業として、朝鮮半島の三国時代末から統一新羅を経て高麗に至る、物品貨幣を含めた貨幣流通の実態について、残されたさまざまな資料から明らかにしていきたい。その上で、日本列島の貨幣流通のあり方と比較検討し、東アジア世界における貨幣流通の特質や、貨幣をめぐる対外交流の様相などを考察していきたい。
朝鮮半島における貨幣史研究、流通経済史研究がたちおくれている原因のひとつに、文献史料の少なさがあげられる。しかしながら、近年、発掘調査によって、中国銭そのものが出土したり、流通経済の実態をうかがわせる木簡が出土したりしていて、当該期の流通経済の実態をさぐる試みは、必ずしも不可能ではない段階にきている。例をあげれば、近年、三国時代の百済の都が置かれていた扶余の双北里遺跡から、官人に対する穀物の貸付を記録した 7 世紀前半代の木簡が出土し、その記載内容から日本古代社会において広く行われていた稲や銭の貸付制度である「出挙」と、きわめて類似したシステムが 7 世紀前半段階において行われていたことが明らかになった。これは、従来まったく明らかでなかった百済の流通経済の実態に光明を与える発見であった。
また、近年、朝鮮半島の西海岸では、水中考古学の調査により高麗時代の沈没船が数多く発見され、そこから、全羅道（朝鮮半島西南地域）から高麗の都に運ばれたさまざまな物品に付けられた付札が確認されている。こうした付札の分析も、高麗時代の流通経済の実態を知るための重要な資料となりうる。本研究では、当該期の流通経済の実態全体を視野に入れながら、貨幣流通の実態とその意味について考察していきたい。

２．研究の目的

本研究は、東アジア世界における貨幣流通の実態を明らかにすることの前提として、７世紀から 14 世紀にいたる時期における、朝鮮半島における貨幣流通の実態について明らかにすることを目的とする。古代・中世において銅銭が広く流通していた日本列島とは大きく異なり、同時期における朝鮮半島で銅銭が広く流通することはなかった。そのためか、当該期の朝鮮半島における貨幣流通の実態についての研究も、これまでほとんどなされてこなかった。本研究では、朝鮮半島に残る文献史料や考古資料、出土文字資料などを博捜し、前近代朝鮮半島における貨幣流通の特質と、その歴史的背景、さらには同時期の中国や日本列島との比較研究などを試みる。

３．研究の方法

数回にわたって、韓国において調査を行い、貨幣関係資料の収集や、物流に関わる木簡の検討などを行った。貨幣については、国立中央博物館、国立公州博物館、梨花女子大学博物館、国立慶州文化財研究所、韓国銀行貨幣金融博物館等、韓国内各地の博物館や文化財研究所の所蔵品などを調査した。また、韓国内で発表されている高麗時代までを対象とした貨幣史に関わる論文や流通経済史に関わる論文、さらには研究書についても、収集し、研究の現段階を把握することにつとめた。
物流に関わる木簡については、国立海洋文化財研究所で調査が進められている、高麗時代の沈没船から出土した、中世の荷札木簡を調査・検討した。高麗時代の沈没船から発見

された荷札木簡は、記載内容が物品名のみならず、発送責任者や運搬担当者、さらには納入先など、実に多岐にわたり、高麗時代の物資輸送の実態を知る第一級の史料群である。本格的な分析や意義付けには、さらなる時間を要するが、これにより、当時の流通経済の様相を知る手がかりが得られたものと考える。

こうした、流通史の観点からだけではなく、その他の観点から、朝鮮半島における貨幣の意味を考えるための資料調査も行った。具体的には、公州の武寧王陵出土の買地券の石碑、そして国立中央博物館所蔵の高麗時代の石製買地券などの検討である。これらは、墓を作るための土地を、大地の神から買い上げる目的で作成される、一種の契約文書だが、この中に、大地の神から買い上げる土地の対価として、銭貨が用いられるのである。現実の経済活動のみならず、神との交渉という呪術的な目的においても、貨幣は使用されていた。こうした買地券は、もともと古代中国に端を発するものであり、中国の買地券の影響を受けていることは明白である。

日本にも同様の事例がみられ、大地の神との土地売買契約において貨幣が用いられることは、東アジア世界に共通した現象であることがわかった。

４．研究成果

本研究では、東アジア、とりわけ日本と朝鮮半島の古代から中世にかけての貨幣流通の問題を取り上げた。中国で発明された鋳造貨幣は、朝鮮半島を経て日本列島に伝わり、古代から中世にかけて広く流通した。その伝播の実態を探ることを本研究の目的とした。とくに朝鮮半島における貨幣流通の実態に注目し、その背景となる物資の流通にも着目した。韓国内において、資料調査や資料収集を進めたが、具体的には、高麗時代の沈没船沈没船から引き揚げられた木簡の解読・検討により、高麗時代における半島内の物資の流通の実態などが明らかになりつつあり、これに関しては、さらに検討を深めていくつもりである。

本研究の検討により、古代・中世までの朝鮮半島における貨幣は、実用的な意味合いよりもむしろ呪術的な役割を果たしていた場合が多かったことが明らかになった。古くは、6 世紀の百済・武寧王陵に納められた五銖銭が、陵墓の土地を買うための交換手段として用いられている。時代が下って、高麗時代の買地券（墓を買うために神と契約するための文書）にも、神との間で土地を契約する際に銅銭が登場する。この買地券は、中国にも数多くみられ、もとは中国で広く行われていたものが、朝鮮半島にも影響を与えてものと考えられる。同様の事例は日本にもみられ、買地券にみられるような、大地の神との銭貨による交渉は、東アジア世界に共通する特質であると考えられる。

このように朝鮮半島では、中国から影響を受けた銅銭は呪術的な用途で用いられる場合が多いと考えられるが、現実の経済活動においては、現物貨幣が広く流通していたと考えられる。7 世紀前半に百済の都が置かれていた扶余の双北里遺跡から、「鉄代綿十両」と記された木簡が出土したが、これは鉄の代わりに綿を納めたことを示す内容の記述と思われる。古代の百済においては、鉄と綿の交換が比較的容易に行われていた事実のみならず、綿が貨幣の役割を果たしていたことが、この木簡から明らかになったのである。これは、日本の古代社会において、現物貨幣となるものは、綿など、日本と共通するものが含まれており、これは、東アジア世界における貨幣流通の特質と位置づけることができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

三上喜孝「日本出土の古代木簡　－近年（2008～2011 年）の出土木簡－」『木簡と文字』（韓国）７、2011 年、193－200 頁。

三上喜孝「日本出土の古代木簡―近年（2012 年）の出土木簡」―『木簡と文字』（韓国）９，2011 頁-209 頁。

三上喜孝「山形大学小白川図書館所蔵『物部守屋大連之碑』拓本について」『山形大学歴史・地理・人類学論集』14，63-72 頁。

〔学会発表〕（計　3 件）

三上喜孝「『龍王』銘木簡と古代東アジア世界」、国立中央博物館特別展「文字・それ以後」国際シンポジウム、2011 年 10 月 14 日、於韓国国立中央博物館。

三上喜孝「古代日本における繊維製品の生産と流通」、山梨県考古学協会（招待講演）、2013 年 1 月 15 日～16 日、於帝京大学山梨文化財研究所

三上喜孝「古代地方社会と文字文化」国立歴史民俗博物館国際シンポジウム（招待講演）、2012 年 12 月 15 日～16 日、於イイノホール

〔図書〕（計　2 件）

三上喜孝（共著）『古代中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、2011 年、81－95 頁。

三上喜孝『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館、2013 年

６．研究組織
(1)研究代表者
三上　喜孝（MIKAMI　YOSHITAKA）
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：10331290